



中学生における個性の類似性・異質性認知と学級集団凝集性認知との関連

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 北海道教育大学 公開日: 2010-09-13 キーワード: 作成者: 藤村, 敦, 越, 良子 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00005874

中学生における個性の類似性・異質性認知と学級集団凝集性認知との関連

藤村 敦・越 良子*

北海道教育大学附属特別支援学校

*上越教育大学

The Relation of Perceived Individual Similarity and Differences to Perceived Class Cohesiveness in Junior High School Classroom

FUJIMURA Tsutomu and KOSHI Ryoko*

School for Special Needs Education attached to Hokkaido University of Education

*Joetsu University of Education

概 要

本研究は、学級内の2者関係における類似性及び異質性の認知が、学級全体の集団凝集性の認知に繋がるという問題意識に基づき、他者への類似性・異質性認知の変化と学級集団凝集性認知、自尊感情、他者や集団から得る安心感との関連について検討した。中学生284名を対象に調査を実施した。結果として、以下のことが明らかにされた。中学生、特に女子において、生徒相互の感じる親密さの度合いが大きくなるに従い、親密な他者との類似性認知の量が大きくなり、親密ではない他者との類似性認知の量も大きくなった。このことが、学級集団凝集性認知および学級集団から得る安心感と関連することが明らかとなった。さらに、親密ではない他者に類似性を認知すると同時に部分的に異質性認知も可能になり、それもまた集団凝集性認知と関連をもつことが示唆された。これらの結果は、生徒の個性の類似性・異質性が学級に組み込まれていき、凝集性の高い学級がつくられていくプロセスを示唆するものである。

問題と目的

近年、教育界では“個に応じた教育”が叫ばれている。これは、個々の人の特性を尊重した教育が重要であるという主張である。個を尊重することは、学級集団の形成においても重要な機能を果たす。根本（1986）は、“個性”について学級集団にとって必要なものであると述べている。個性は生徒相互にとって、類似性や異質性として認知

される。相互の類似性や異質性が、学級において生徒相互の関係をつくり、そこでの活動や共通ルールの獲得を通して教育活動が展開されるのである。つまり、学級活動の進展の中で、生徒が相互に類似性や異質性をも認知し、受け入れていくことによって、学級は凝集性の高いものになり、生徒たちは「学級集団」になっていくと考えられる。その過程において、類似性や異質性の認知の変容はいかに学級集団凝集性の認知と関連をも

ち、また一方で学級の凝集性の認知は個人とどのような関連をもつのだろうか。本研究は、これらの各変数の関連を、生徒相互が感じる親密さの度合(以下親密度)に伴う各要因を分析することで、その機序を想定することを目的とする。

学級集団凝集性認知を生むメカニズム

類似性認知が他者との関係を親密にすることは、古くから指摘されている(Byrne, 1971)。自己カテゴリー化理論(Turner, 1985)によれば、カテゴリー内成員に対する類似性認知が社会的アイデンティティに基づく自己定義を促す。すなわち類似性認知がカテゴリーを内集団にする。このような類似性認知が対人関係や集団認知を変容させる過程は、蘭・高橋(2001)によって、システム論の観点から論じられる。それによると、集団内の一他者の中に自己との類似性を認めることができた時、他者の受容が可能になる。つまり、他者の他者性の中の一部に自己を見つけることが、他者の受容につながるということである。そして、類似性認知量がある一定の閾値を越えた時に、その他者は内集団となる。これが繰り返されることで、集団全体の成員に対する認知の変容がおこるのである。

しかしながら、集団内に自分と類似の他者のみが存在することはあり得ない。異質な他者とともにあり、異質な他者を受容することなしには集団は形成され得ないであろう。従って学級集団において個人間の関係が集団に与えるメカニズムを想定する際には、個人間の異質性認知を考慮する必要もある。

個人間の類似性・異質性認知と安心感、自尊感情

下斗米(1990)は、他者との親密度を3段階に分け、親密度が高い関係では、類似性のみならず、異質性も認知されることを明らかにしている。それによると、他者との親密度が低い段階(以下親密度低群)より、その次の段階(以下親密度中群)の方が自己開示量が高く、類似性も認知される。そして、親密度が最も高い段階(以下親密度高群)では異質性が認知される。

しかし、下斗米も考察しているように、分析の

内容からは親密度中群で認知された類似性認知は親密度高群で小さくなっているとはいきれない。つまり、親密度高群においては類似性と異質性が混在している可能性がある。下斗米・佐藤(1988)も、親密な他者との間で関係を維持するにあたっては、親密な他者に対して異質性のみを期待するだけではなく、同時に互いの類似性を確認しようとするを明らかにしている。これらのことから、親密度中群では類似性が認知され、親密度高群において、類似性及び異質性が同時に認知されると考えられる。

親密度が低群から高群になるに従って、類似性が一度認知され、それとは相反する異質性が認知されるようになるのはなぜだろうか。親密な他者との間の類似性認知は相手への好意をもたらし(Byrne, 1971)、相手との肯定的な心情関係をつくる。一方、異質性認知は、心情関係をもたさず、また、自己の不適切性を突きつけ得る。他者との関係を維持しながらもそうした異質性を認知できることは、相手との間に十分な情緒的安心感があることを意味するだろう。それは、その他者との間に異なる部分があることをも受容できるような関係になっていることを意味している。つまり、親密度中群において、類似性を認知したことにより、その他者によって自己の存在の妥当性が保証され、自己の存在が認められるという安心感を得られる。それが十分なものになったとき、自己防衛の必要がなくなり、安心して異質性認知がなされるものと考えられる。異質性の認知が生徒の友人関係のより発達した段階において現れることは、保坂・岡村(1986)からも示唆される。それによると、友人関係の発達初期、中期のギャング・グループ及びチャム・グループにおいては、同行動あるいは同一言語による類似性によって一体感をもち、仲間関係が作られる。しかし、関係発達後期のピア・グループにおいては、上記の関係に加えて、相互の価値観や将来を語り合う関係が生じ、互いの異質性をぶつけ合い、認め合うことで、互いを尊重しあう仲間関係が成立する。つまり、一体感を経験し、受容される経験

を経た後には、相互の異質性をぶつけ合うことが可能になるということである。また、梶田(1980)によれば、類似性を認知するようになるという傾向は自己評価レベルの低い人には見られないという。このことから、類似性認知と自尊感情には関連があると考えられ、類似性認知により得られると考えられる安心感は、自分自身において自己価値を高く認識すること、すなわち高い自尊感情につながるものと思われる。

また、親密度高群において、類似性認知と異質性認知という、相反する認知が混在しているというのはどういうことであろうか。磯崎・高橋(1993)の結果は、視点の違いが類似性・異質性認知に差異を生じさせることを示している。彼らによると、親密な他者との関係において時間が経過すると、高関与な部分では類似性を認知するようになるが、低関与な部分では類似性は認知されない。つまり、個人間の関係においては自分にとって高関与側面であるか低関与側面であるかが重要な要素である可能性がある。高関与な側面は自己における重要度が高く、自己評価への影響力も大きい(Tesser,1984)。このことから高関与な部分での類似性認知は、より大きな安心感と自尊感情につながると考えられる。

従って、親密度高群において類似性認知の影響は少なくなっているとはいいきれないという下斗米(1990)の考察も合わせて考えると、親密度高群においても高関与な部分では類似性認知を維持していることが予想できる。それと同時に高群において異質性認知が確認されたということは、低関与な部分での異質性認知が見られた可能性がある。親密度中群においては、高関与部分に類似性を感じ、親密な他者から安心感を得、自尊感情が高まった結果、低関与な部分での異質性認知を可能にすると考えられる。

個人間の類似性・異質性認知から学級集団凝集性の認知へ

このような個人間での安心感の増加、自尊感情の維持・高揚によって、他者の異質性を認知できるようになるという機序は、友人間のみならず、

他の友人や学級全体への認知においても成立すると考えられる。これまでの考察によって示された、集団の中での局所的な個人間の類似性・異質性認知の変化が学級集団凝集性の認知にどのようなつながるのかについて、先述の蘭・高橋(2001)の視点を交えて整理したい。

親密な他者との関係において親密度中群では、他者に対し、選択的に高関与な性格・能力について類似性を認知するようになると考えられる。このような選択的な類似性の認知は、自己の妥当性を保証するとともに、自分の存在が認められた安心感を得ることにつながっていく。そしてこのことは自尊感情の維持・高揚の機能をもつ。そして類似性認知の量が一定量を越えた時、もはや安心感を得るための類似性認知の必要性がなくなり、親密な他者の低関与な性格及び能力の異質性を認知できるようになる。この時点で初めてこれまで類似な存在であった親密な他者を異質な部分を含んでいる他者として受容できるようになる。親密な他者の低関与な部分に異質性を見出すのを契機に、親密ではなかった他者をもつ異質性をも認知できるようになり、親密な他者と同様に親密ではない他者をも受容できるようになる。その繰り返しによって学級集団凝集性や集団から得る安心感が高まると考えられるのである。

本研究では、上記のようなプロセスが学級集団において見られることを想定し、それを実証的に検討することを目的とする。

そこで本研究では、学級内に存在する対人関係の親密度によって、中学生を親密度高群、中群、低群に分類し、親密度が高くなるに伴って変わると考えられる、その友人を含めた学級内他者に対する類似性・異質性認知や自尊感情及び学級集団凝集性認知が群間でいかに異なるか、その様相を横断的に検討することを第1の目的とする。また、親密度の程度によって変化すると考えられる類似性・異質性認知が他の変数とどのような関連をもつのかを明確にすることを第2の目的とする。なお、検討に際し、類似性・異質性の具体的内容としては、中学生の子ども同士が認知しやすいと考

えられる個人の「性格差」及び「学習能力差」を扱う。

本研究の仮説をまとめると以下の通りである。仮説提示に先立ち、親密な他者との親密度の段階が高くなるに従って生じると考えられる各種変数の変化モデルを Table 1 に示す。

仮説 1 親密度中群では親密な他者（以下親密他者とする）に対して高関与な部分で類似性を認知するようになるが、低関与な部分及び親密でない他者（以下非親密他者とする）に対しては、高群で異質性を認知するであろう。

仮説 2 親密他者に対して高関与な部分で類似性認知をするようになると考えられる親密度中群に、個人から得る安心感、自尊感情の高まりが見られるであろう。

仮説 3 親密他者に対して低関与な部分で異質性を感じ、非親密他者に対しても異質性認知をするようになると考えられる親密度高群に、学級集団凝集性の認知及び集団から得る安心感の高まりが見られるであろう。

仮説 4 親密他者に対する類似性認知の高まりは、親密他者から得る安心感及び自尊感情の高まりに正の影響を与えているであろう

仮説 5 非親密他者に対する異質性認知の高まりは、学級集団凝集性の認知及び集団から得る安心感に正の影響を与えているであろう。

Table 1 対人関係の親密度に伴う安心感及び凝集性の変化モデル

調査材料	親密度			
	低群	中群	高群	
親密な他者	高関与	-	類似性認知	類似性認知
	低関与	-	-	異質性認知
親密でない他者	高関与	-	-	異質性認知
	低関与	-	-	異質性認知
個人から得る安心感				
集団から得る安心感				
自尊感情				
学級集団凝集性認知				

注) 表中の黒帯の幅は、各変数の強まりを示す

方 法

調査対象

2つの中学校の3年生8学級284名(男子146名, 女子138名)であった。これらすべての学級は、2年生からクラス替えがなく、2年間同じ構成メンバーであった。

調査時期

調査は2005年9月に実施された。

質問紙構成

親密度評定 Berscheid, Mark & Omoto (1989) の親密さ尺度 (Relationship Closeness Inventory: RCI) をもとに、中学生の生活に適するよう親密度評定に関する質問を新たに作成した (Table 2)。

Table 2 親密感評定尺度の質問項目

《接触時間》

- 1 あなたは友だちとどのくらい電話(またはメール)をしますか
- 2 あなたは休み時間や放課後友だちといっしょに過ごしますか

《関係の強さ》

- 1 あなたは友だちのきょう味や関心について、同じものにきょう味・関心もちますか

《行動の多様性》

- 1 通知表を見せ合う
- 2 勉強を教えてもらう(または教える)
- 3 電話(またはメール)をする
- 4 違う教室に移動するときにはいっしょに行く
- 5 休み時間、いっしょに話をする
- 6 いっしょにトイレに行く
- 7 休みの日にいっしょに遊ぶ
- 8 おそろいものを買う
- 9 本(またはゲーム)をかきかりする
- 10 悩みを聞く
- 11 休み時間、いっしょに遊ぶ
- 12 グループで活動する時には、いっしょになる
- 13 休みの日にいっしょにでかける
- 14 いっしょに学校から帰る
- 15 保健室(または職員室)にいっしょに行く

《話題の多様性》

- 1 自分の性格の中で嫌いなことについて
- 2 現在もっている目標について
- 3 自分の容姿(スタイルや顔・身長・体重)の長所や短所について
- 4 友人に対する好き嫌いについて
- 5 好きな男子や女子について
- 6 クラス内での自分の仕事や役割について
- 7 自分の家庭生活での出来事について
- 8 自分の好きなテレビ・音楽・マンガについて
- 9 人のうわさ話について
- 10 自分のテストの結果や成績について
- 11 自分の運動神経について
- 12 異性への関心や悩み事について
- 13 こづかいの使い道について
- 14 不安や悩みについて
- 15 先生や授業をどう思っているかについて

RCI は、接触時間 (frequency)、関係の強さ (strength)、行動の多様性 (diversity) の 3 側面からなる尺度である。接触時間は、自ら一緒にいる友人を選ぶことのできる休み時間と放課後にどの程度一緒にいることが多いかと、電話やメールの頻度について回答を求めた。関係の強さは、他者と同じものに興味・関心をもつかどうかを問うものとした。行動の多様性については、自由記述法により得られた中学生の親密と思われる行動をもとに、行動の多様性の指標を作成した。また、回答の際には親密他者について問うために「学校にいる間一緒に行動することが多い人」を想起するよう教示した。回答は、接触時間については「よくする (項目 1)、よく過ごす (項目 2)」(4 点) から「ぜんぜんしない (項目 1)、ぜんぜん過ごさない (項目 2)」(1 点) の 4 件法、また、関係の強さについては、興味・関心を「とてももつ」(4 点) から「ぜんぜんもたない」(1 点) の 4 件法で評定された。さらに、多様性については多様な行動・話題について当てはまるものすべてに○をつけるよう求めた (0 - 15 点)。

性格の類似性・異質性認知尺度 児童・生徒用の性格の類似性・異質性認知についての質問紙はほとんど見られない。本研究では、林(1978)の対人認知構造の基本 3 次元に基づき、下位次元 7 因子 (Table 3) について自分と他者がどのくらい似ていると、あるいは異質であると認知しているのかについて回答を求めた。

回答の際には親密他者、非親密他者について問うために、「学校にいる間一緒に行動することが多い人」及び「学校であいさつする位の人」を想

起するよう教示し、それぞれについてその人との類似度・異質度について回答を求めた。また、このうち「大切にしている性格」に 3 つ○をつけるよう教示し、○のついた 3 性格を高関与な性格、○のつかなかった 4 性格を低関与な性格とした。

回答は、「似ている」(4 点) から「似ていない」(1 点) の 5 件法で評定された。

学習能力の類似性・異質性尺度 学校の教科 (国語、数学、社会、理科、英語、美術、技術、家庭科、音楽の 9 教科) を提示し、その教科の成績について自分と他者がどの位似ているとまたは異質であると認知しているのかについて回答を求めたこととした。また、高関与科目、低関与科目の弁別については、磯崎・高橋(1993)を参考に、提示された教科から「誰にも負けたくないと思うもの(高関与科目)」、「負けても気にならないと思うもの(低関与科目)」を 2 科目ずつあげるよう教示した。回答の際には「学校にいる間一緒に行動することが多い人」及び「学校であいさつする位の人」を想起するよう教示し、それぞれについてどの程度に似ているか回答を求めた。

回答は「似ている」(5 点) から「似ていない」(1 点) の 5 件法で評定された。

学級集団凝集性認知尺度 Hogg (1992) は学級集団凝集性を集団の魅力と定義している。本研究で扱う凝集性は実際の集団のまとまり度合いではなく、個人の集団に対する認知である。よって Hogg の定義に従い、学級集団凝集性の認知を、調査対象者の感じる集団の魅力測定していると考えられる田崎(1984)を参考に尺度を作成した (Table 4)。各項目について「そう思う」(4 点) から「そう思わない」(1 点) の 4 件法で評定された。

自尊感情尺度 Kokenes (1974) が作成した自尊感情測定尺度を基準とし、各項目を作成した (Table 5)。Kokenes が見出した自己の適切感、自己の不適切感、自己拒否、学校適応と学校不適応の各因子から、因子負荷量が比較的高く、かつ質問が中学生にとってわかりやすいものを質問項目として選出した。各項目について、「そう思う」

Table 3 提示された性格 7 項目

提示された性格	林(1978)の下位次元
正直な性格	誠実性
じっくり考える性格	理知性
積極的な性格	力本性
親しみやすい性格	親和性
おだやかな性格	温厚性
明るい性格	明朗性
ひととかかわるのが好きな性格	外向性

(4点)から「そう思わない」(1点)の4件法で評定を求めた。

個人, 集団から得る安心感尺度 本研究で扱う個人から得る安心感は, 自分はこれでよいのだと感じることのできる安心感である。つまり, 自分らしさを許容することであるとも考えることができる。また, 集団から得る安心感は, 集団内において自分らしさを発揮することが無理なくできるような安心感である。

柴橋(2004)は, 自分らしさを大切にする「自己表明」, 自分とは異なる感情を受け入れる「他者の表明を望む気持ち」をもっていることをアサーションと定義した。その上で柴橋は, アサーションの構成概念である心理的要因を検討している。その結果, 第1因子として「安心感」が抽出された。

これらのことから, 柴橋の安心感の因子は自分らしさを大切に, 自分とは異なる感情を受け入れることができたことにより生まれる安心感であると考えることができる。本研究では, この柴橋(2004)において作成されたアサーションの心理的要因の安心感因子質問項目を用い, 「友だち」という表現を, 個人から得る安心感を測定する際には「その人は」に, 集団から得る安心感を測定する際には「クラスの人たちは」に変更し使用した (Table 6, 7)。個人から得る安心感の回答の際には「学校にいる間一緒に行動することが多い人」を想起するよう教示した。

各項目について「そう思う」(4点)から「そう思わない」(1点)の4件法で評定された。

手続き

授業時間等を利用して, 集団で実施した。

結 果

1. 各尺度の検討と得点化

有効回答数232名(男子114名, 女子118名)のデータを分析対象とした。分析に先立ち, 各尺度の各項目の平均値, 標準偏差を求めた。学級集団凝集性尺度及び, 自尊感情尺度, 個人・集団から得る

Table 4 学級集団凝集性認知尺度の主成分分析結果

項 目	第1主成分
今のクラスの人たちといっしょになってよかったと思う	.938
今のクラスの人たちが好きです	.914
今のクラスの人たちとうまくやっていけると思う	.900
今のクラスの人たちといっしょにいたいと思う	.880
今のクラスの人たちのチームワークがとれていると思う	.820
固有値	3.972
寄与率(%)	79.44

Table 5 自尊感情尺度Varimax 回転後の因子負荷量

項 目	I 自己不適切感		II 自己適切感	
	I 自己不適切感		II 自己適切感	
わたしは, 自分自身を情けなく思うことがよくあります	.75			-.06
わたしは, 学校でがっかりすることがよくあります	.66			.06
もしできるなら, 変えたいと思うところが, わたしにはたくさんあります	.62			.01
わたしは, だれかほかの人であればいいのに, とよく思います	.59			.04
わたしは, せいっぱい活動に取り組んでいます	.03			.77
わたしは, 学校でよくやっていると思います	.02			.74
わたしは, 決めたことは, がんばってやり通すことができます	-.01			.70
固有値	2.321			2.078
累積寄与率(%)	33.16			62.85

安心感尺度項目に一部天井効果が見られたが, いずれの項目も尺度の解釈をする上で必要と判断し, そのまま残すこととした。

親密度評定 得点を標準得点化し, 親密度評定3側面(接触時間, 関係の強さ, 多様性)の各平均点を加え, 3で除した値を算出した。

性格・能力の類似性・異質性認知尺度 高関与, 低関与な性格, 能力ごとにその素点の平均を算出した。

学級集団凝集性認知尺度 主成分分析を行った結果, 1主成分が確認された (Table 4)。因子負荷量は全て.80以上, 寄与率は79.44%であった。また α 係数は.93を示し, 高い内部一貫性が得られた。その後の分析にあたり, 素点の平均を算出した。

自尊感情尺度 主因子法に基づく因子分析の結果, 2因子が採択された。その後 Varimax 回転で因子分析を行った。どちらの因子にも.40以上の因子負荷量をもたない項目を削除し, 再度因子

分析を行った (Table 5)。α 係数は第 1 因子 .73、第 2 因子 .64 であり、許容範囲であると考えられる。その後第 1 因子を「自己不適切感」因子、第 2 因子を「自己適切感」因子と命名した。その後の分析にあたって、各因子の素点の平均を加え 2 で除した値を算出した。

個人・集団から得る安心感尺度 主成分分析を行った結果、1 主成分が確認された (Table 6, 7)。因子負荷量は全て .40 以上、寄与率は個人から得る安心感尺度において 43.94%、集団から得る安心感尺度において 54.66% であった。また、α 係数は個人から得る安心感尺度で .67、集団から得る安心感尺度では .79 であり、許容範囲内であると考えられる。その後の分析にあたり、素点の平均を算出した。

Table 6 個人から得る安心感尺度の主成分分析結果

項目	第1主成分
困ったときその人に相談すると真剣に考えてくれる	.783
その人は私の言葉にいつも耳を傾けてくれる	.766
その人はわたしがその人と違う考えでも認めてくれる	.757
R わたしははっきり自分の考えを言うとその人はいやな顔をする	.490
R その人の考えに反対すれば仲間はずれにされる	.430
固有値	2.197
寄与率 (%)	43.94

注) R のついた項目は逆転項目

Table 7 集団から得る安心感尺度の主成分分析結果

項目	第1主成分
R わたしははっきり自分の考えを言うとクラスの人たちはいやな顔をする	.795
R クラスの人たちの考えに反対すれば仲間はずれにされる	.746
クラスの人たちはわたしの言葉にいつも耳を傾けてくれる	.741
クラスの人たちはわたしが他の人たちと違う考えでも認めてくれる	.732
R 自分の気持ちや考えをはっきり言えばクラスの人たちと気まずくなる	.677
固有値	2.733
寄与率 (%)	54.66

注) R のついた項目は逆転項目

2. 各親密度における類似性・異質性認知の様相と集団凝集性認知、自尊感情との関連(仮説 1 ~ 3 の検討)

親密度が高くなる際の各尺度の得点の変化を検

討するため、各親密度を独立変数、他の尺度を従属変数とする分散分析を行った。親密度の群分けは平均値 ± 0.5SD の値を境とし、親密度低群、中群、高群に群分けした。

男子における分析結果を Table 8 に示す。男子では、まず親密他者に対しての高関与な性格の類似性・異質性尺度において群間に有意な差がみられた ($F(2,111) = 4.25, p < .05$)。LSD 法を用いた多重比較によると、親密度高群の方が低群より有意に得点が高く、また、親密度中群の方が低群よりも有意に高く、類似性が認知されていた (各 $p < .05$)。また、低関与な性格の類似性・異質性認知尺度においても群間に有意な差がみられた ($F(2,111) = 4.17, p < .05$)。多重比較によると、親密度高群の方が低群よりも有意に高く、中群の方が低群よりも有意に高かった (共に $p < .05$)。さらに、個人から得る安心感尺度においても有意差が見られ ($F(2,111) = 4.34, p < .05$)、高群が中群、低群よりも有意に高かった ($p < .05$)。

次に、女子における分析結果を Table 9 に示す。女子では、まず親密他者に対しての高関与な性格の類似性・異質性尺度において群間に有意な差がみられ ($F(2,111) = 8.01, p < .01$)、親密度高群の方が低群より有意に高く ($p < .05$)、親密度中群の方が低群よりも有意に高かった ($p < .05$)。また、低関与な性格の類似性・異質性尺度においても群間に有意な差がみられ ($F(2,111) = 18.36, p < .01$)、高群の方は中群より有意に高く ($p < .05$)、中群は低群より有意に高かった ($p < .05$)。親密他者に対しての高関与科目における学習能力の類似性・異質性尺度においても群間に有意な差がみられ ($F(2,111) = 3.53, p < .05$)、高群の方が低群より有意に高かった ($p < .05$)。また、低関与科目における学習能力の類似性・異質性尺度において群の効果は有意な傾向を示し ($F(2,111) = 2.62, p < .10$)、高群の方が低群より有意に高かった ($p < .05$)。

学級集団凝集性認知尺度においても群間に有意な差がみられた ($F(2,111) = 3.34, p < .05$)。多

重比較によると、高群の方は低群より有意に高く ($p < .05$)、低群より中群の平均が有意に高かった ($p < .05$)。さらに、個人から得る安心感尺度において群間に有意な差が見られた ($F(2, 111) = 10.54, p < .01$)。多重比較によると、高群の方は低群の平均より有意に高く ($p < .05$)、低群より中群の平均が有意に高かった ($p < .05$)。

3. 親密他者に対する類似性・異質性認知が自尊感情に影響を与える過程についての分析(仮説4の検討)

親密他者に対する類似性・異質性認知が自尊感情及び個人から得る安心感に影響を及ぼしている過程について検討するため、性格及び学習能力の類似性・異質性認知を外生変数、自尊感情、個人から得る安心感を内生変数とする共分散構造分析を男女、性格・能力の類似性・異質性認知ごとに行った。分析にあたっては、すべての誤差変数

(e) の係数を1に固定して分析を行った。また、モデルの採用にあたっては、 χ^2 値が $P < .05$ 、適合度指標(GFI)及び修正適合度指標(AGFI)値が.900以上のものを採用した。

女子の分析結果を Figure 1, 2 に示す。分析の結果、性格・能力いずれにおいても男女共に「親密他者に対する高関与な性格、高関与科目の類似性・異質性認知」から「個人から得る安心感」へ有意または有意傾向の正のパスが示された(性格 男子 $\beta = .18$, 女子 $\beta = .18, p < .10$, 能力 男子 $\beta = .17, p < .10$, 女子 $\beta = .32, p < .001$)。また、性格においては男女共に、能力においては女子のみにおいて「親密他者に対する低関与な性格、低関与科目の類似性・異質性認知」から「個人から得る安心感」へ有意な正のパスが示されたが(性格 男子 $\beta = .20, p < .05$, 女子 $\beta = .34, p < .01$, 能力 女子 $\beta = .22, p < .05$)、能力の男

Table 8 男子の親密度段階低群～高群における各尺度の平均点、標準偏差と1要因分析

		低群 (N=21)	中群 (N=71)	高群 (N=22)	1 要因分散分析結果	
					F 値	多重比較
親密な他者に対する類似性・異質性認知						
性	高関与	2.76 (1.09)	3.28 (0.82)	3.53 (0.84)	4.25*	低群<中群* 低群<高群*
	低関与	2.62 (1.10)	3.08 (0.62)	3.27 (0.80)		
能	高関与	2.83 (1.13)	3.11 (1.02)	2.93 (1.03)	0.63	
	低関与	2.74 (1.09)	2.99 (1.04)	3.16 (1.17)		
親密ではない他者に対する類似性・異質性認知						
性	高関与	2.76 (0.87)	2.93 (0.86)	3.00 (0.94)	0.42	
	低関与	2.49 (0.77)	2.83 (0.75)	2.80 (0.81)		
能	高関与	2.95 (0.91)	2.75 (1.04)	2.91 (0.86)	0.42	
	低関与	2.64 (0.79)	2.63 (0.92)	2.68 (1.01)		
学級集団凝集性		2.89 (0.85)	3.19 (0.70)	3.33 (0.83)	1.94	
自尊感情		2.67 (0.37)	2.49 (0.50)	2.56 (0.44)	1.20	
個人から得る安心感		2.97 (0.58)	3.14 (0.38)	3.35 (0.36)	4.34*	低群<高群* 中群<高群*
集団から得る安心感		2.90 (0.43)	2.92 (0.59)	2.99 (0.56)	0.15	

* $p < .05$
注) カッコ内は標準偏差

Table 9 女子の親密度段階低群～高群における各尺度の平均点、標準偏差と1要因分散分析の結果

		低群 (N=26)	中群 (N=67)	高群 (N=25)	1 要因分散分析結果	
					F 値	多重比較
親密な他者に対する類似性・異質性認知						
性	高関与	2.32 (0.89)	3.06 (0.98)	3.33 (0.91)	8.01*	低群<中群* 低群<高群*
	低関与	2.38 (0.70)	3.11 (0.70)	3.60 (0.76)		
能	高関与	2.58 (1.29)	2.98 (0.93)	3.36 (1.02)	3.53*	低群<高群*
	低関与	2.62 (1.08)	2.93 (1.17)	3.34 (1.03)		
親密ではない他者に対する類似性・異質性認知						
性	高関与	2.22 (0.87)	2.61 (0.90)	2.72 (0.91)	2.31	
	低関与	2.41 (0.90)	2.66 (0.88)	2.81 (1.00)		
能	高関与	2.33 (0.98)	2.76 (0.86)	2.60 (0.98)	2.09	
	低関与	2.27 (0.91)	2.56 (0.83)	2.58 (1.03)		
学級集団凝集性		2.65 (0.80)	3.08 (0.86)	3.22 (0.86)	3.34*	低群<中群* 低群<高群*
自尊感情		2.32 (0.47)	2.44 (0.55)	2.38 (0.56)	0.46	
個人から得る安心感		3.08 (0.57)	3.48 (0.40)	3.62 (0.35)	10.54**	低群<中群* 低群<高群*
集団から得る安心感		2.75 (0.71)	2.84 (0.68)	3.10 (0.74)	1.73	

** $p < .01$, * $p < .05$, † $p < .10$
注) カッコ内は標準偏差

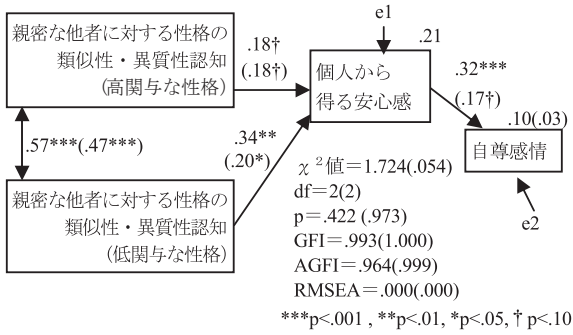


Figure 1 親密な他者に対する<性格>の類似性・異質性情に影響を及ぼすプロセス (カッコ外は女子, カッコ内は男子の値)

注) 単方向の矢印の数字は標準化されたパス係数, 双方向の矢印の数字は相関を示す

子ではその傾向は見られなかった。また、性格・能力いずれにおいても男女共に「個人から得る安心感」から「自尊感情」へ有意または有意傾向の正のパスが示された (性格 男子 $\beta = .17$, $p < .10$, 女子 $\beta = .32$, $p < .001$, 能力 男子 $\beta = .17$, $p < .10$, 女子 $\beta = .32$, $p < .001$)。

4. 非親密他者に対するの類似性・異質性認知が学級集団凝集性認知及び集団から得る安心感に影響を与える過程についての分析 (仮説5の検討)

非親密他者に対するの類似性・異質性認知が学級集団凝集性及び集団から得る安心感に影響を及ぼしている過程について検討するため、性格及び

学習能力の類似性・異質性認知を外生変数、学級集団凝集性認知、集団から得る安心感を内生変数とする共分散構造分析を男女、性格・能力の類似性・異質性認知ごとに行った。

まずは、性格の類似性・異質性認知が及ぼす影響について分析を行った。女子の分析結果を Figure 3 に示す。分析の結果、女子においては「非親密他者に対する高関与な性格の類似性・異質性認知」から「学級集団凝集性」へ有意傾向のパスが示された ($\beta = .22$, $p < .10$)。また、「学級集団凝集性認知」から「集団から得る安心感」へ有意なパスが示された ($\beta = .69$, $p < .001$)。男子において「非親密他者に対する高関与な性格の類似性・異質性認知」及び「非親密他者に対する低関与な性格の類似性・異質性認知」から「集団から得る安心感」へは有意なパスが示されなかった。また、「集団から得る安心感」から「学級集団凝集性認知」へは有意なパスが示された ($\beta = .62$, $p < .001$)。次に、能力の類似性・異質性認知が及ぼす影響について分析を行った。女子の分析結果を Figure 4 に示す。分析の結果、女子において「非親密他者に対する高関与科目における類似性・異質性認知」から「集団から得る安心感」へ負の有意なパスが示された ($\beta = -.21$, $p < .05$) が、男子においては有意なパスが示されなかった。また、女子において「親密ではない他者に対する低関与科目における類似性・異質性認

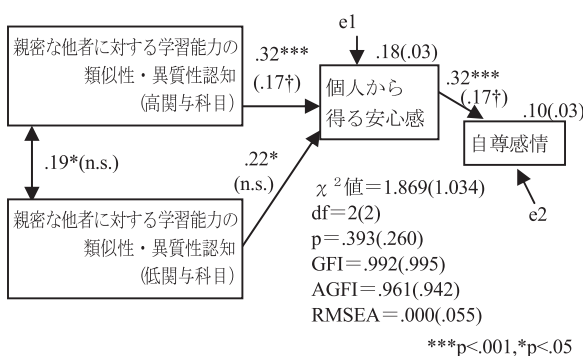


Figure 2 親密な他者に対する<能力>の類似性・異質性認知が自尊感情に影響を及ぼすプロセス (カッコ外は女子, カッコ内は男子の値)

注) 単方向の矢印の数字は標準化されたパス係数, 双方向の矢印の数字は相関を示す

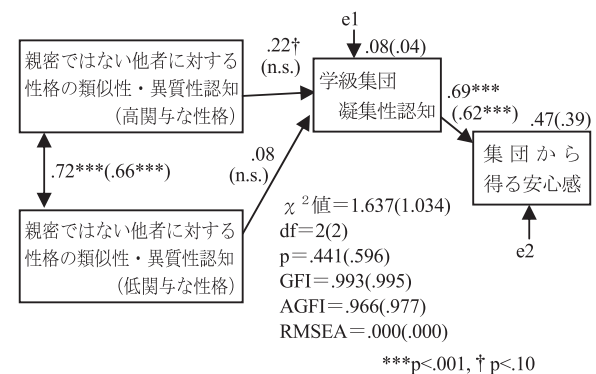


Figure 3 親密ではない他者に対する<性格>の類似性・異質性認知が集団から得る安心感に影響を及ぼすプロセス (カッコ外は女子, カッコ内は男子の値)

注) 単方向の矢印の数字は標準化されたパス係数, 双方向の矢印の数字は相関を示す

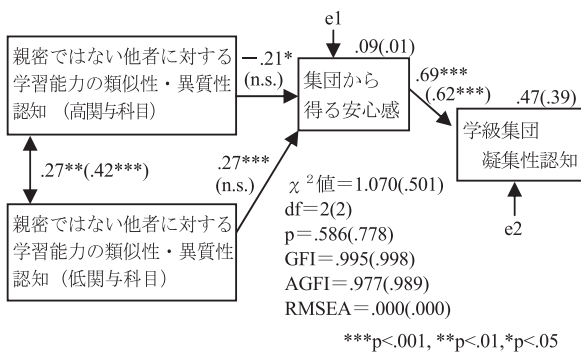


Figure 4 親密ではない他者に対する〈能力〉の類似性・異質性認知が学級集団凝集性認知に影響を及ぼすプロセス(カッコ外は女子, カッコ内は男子の値)

注) 単方向の矢印の数字は標準化されたパス係数, 双方向の矢印の数字は相関を示す

知」から「集団から得る安心感」へ正のパスが示された($\beta = .27$, $p < .01$)が, 男子においては有意なパスが示されなかった。また, 男女共に「集団から得る安心感」から「学級集団凝集性認知」への有意なパスが示された(男子 $\beta = .62$, 女子 $\beta = .69$, $p < .001$)。

考 察

親密度が低群から高群になるに伴う親密な他者に対する認知の様相

Table 8, 9 より, 中学生は親密度が低群～高群になるに従って類似性を認知するようになることが明らかとなった。しかしながら, 類似性を認知する観点には男女差が存在し, 男子では性格に類似性を感じるのに対し, 女子においては性格だけではなく, 能力においても類似性を認知していた。以上の結果から, 仮説1に関しては, 親密度が低群～高群になるに従って, 高関与な部分で類似性が認知されるようになる点は支持された。しかし, 低関与科目における異質性認知は明確には示されなかった。磯崎・高橋(1993)も示唆しているように, 友人関係では関係の進展に伴い, 友人との結びつきや一体感を強く感じ, 友人をより好意的に捉えようとする傾向があると思われる。本研究では, 他者の類似性・異質性を似てい

る・似ていない程度で答えさせており, 好意をもつ他者に対して似ていないと回答しにくかった可能性もあるだろう。また, 中学生にとって, 高関与科目・低関与科目のいずれでも親密な他者と似ていると思えることが情緒的安心感を得るために重要であるかも知れない。また, 親密度が低群～高群になるに従っての自尊感情の高まりは分散分析においては確認されなかったが, Figure 1, 2などの共分散構造分析の結果, 認知された類似性は安心感, 自尊感情を増加させる要因となっていることが明らかとなった。さらに Table 8, 9からは親密度が低群～高群になるに従って親密他者から安心感を得るようになることが示された。これらの結果から総合的に判断すると, 仮説2及び4は支持されると考えられる。親密度が低群～高群になるに従って自己開示する内容が多様になり, 共通な部分を相手の中に見出した結果, 自己の妥当性と自己存在が認められた感覚をもつことができ, 安心感を得るようになったのだろう。こうした他者との関係において得られる安心感が自己価値に関する自尊感情に影響を及ぼしたと考えられる。

また本研究では, 親密他者に対する類似性認知に上述のような性差が見られた。これは, 男女ともに類似性認知により安心感を得ているが, 男子は学力の類似に関係なく親密な関係を深めることができることを示している。つまり, 女子は全ての面での類似性が親密度の進展と関わりをもつが, 男子にとっては, 重要でない能力の類似性や優劣は, 友人であることに意味を持たないということであろう。

非親密他者についての認知と学級集団凝集性および集団から得る安心感との関連

共分散構造分析の結果, 女子において非親密他者に対する高関与な性格の類似性認知が学級集団凝集性認知及び集団から得る安心感に正の影響を与えていた(Figure 3)。また, Table 9では, 女子において親密度段階の進展に伴う学級集団凝集性認知の有意な増加が見られた。これらの結果から, 仮説3は部分的に支持されたと考えられる。

また、有意な差は見られなかったが、非親密他者に関する高関与な性格の類似性・異質性認知の低群から高群にかけての顕著な得点の高まりが見られた。さらに高関与科目における能力の類似性・異質性認知の低群から中群にかけての顕著な得点の高まりも見られた。

これらの結果と先に述べた親密度段階の進展に伴い親密他者に類似性を認知するようになるという一連の結果から、親密度が高くなるに伴い親密他者に対して類似性を認知し、さらに非親密他者においても類似性を認知するようになることが示唆された。つまり、親密他者に類似性を見出し、安心感や自尊感情を得た結果、非親密他者へ関心が広がっていったのではないだろうか。そして周囲にいる非親密他者についても類似性を見出すようになり、そのような他者を受け入れようとしていったのではないか。本研究の調査対象は中学校3年生であり、中学校で過ごした時間は皆2年半程度である。その間非常に親しい友人をもつに至った生徒は非親密他者にも類似性を見出しているということになるだろう。また、このような一連のプロセスを通して、学級集団凝集性の認知の高まりが見られたと考えられるのではないか。但し、分析の結果、男子においては女子において見られた傾向は確認されなかった。先に述べたように、女子は全ての面での類似性が親密度と関係するが、男子は性格の類似性のみが親密度と関係している可能性がある。男子は、女子に比べ相手に幅広い分野に類似性を見出す傾向がそもそも少ないため、親密他者から非親密他者へ関心が広がる傾向がないのかも知れない。

ここで、本研究において特筆すべき点は、共分散構造分析において、非親密他者に関する高関与科目における類似性認知が集団から得る安心感に有意に負の影響を与えていた点である (Figure 4)。つまり、異質性を感じることで集団から安心感を得ることにつながり、学級集団凝集性認知を高めているということである。確かに、分散分析において有意差は見られなかったものの、Table 9の結果、女子においては親密度段階の

進展に伴い、非親密他者の高関与科目において一度は類似性を認知していくも、親密度段階後期に入ると異質性を認知していると思われる得点の変動が見られた。そして、後期では、学級集団凝集性認知が高かった。これらの結果は、類似性が閾値を越える際、部分的には異質性認知が生まれていく可能性を示唆している。親密度が高くなるに伴い、親密他者から安心感を得、周囲に関心が広がり、非親密他者の中にも類似性を見出していく可能性については先に述べた。ここでいう非親密他者はこれまで意識していなかった存在であると考えられる。そして、その非親密他者に関心を向けていくわけであるが、その時には類似性を認知するようになるものの、他の多くの異質な面に触れることになるだろう。親密他者から得る類似性認知に由来する安心感に支えられ、そのような異質な面もすべて含めて受容するようになるのかもしれない。非親密他者を受容し、その数が連鎖的に増えていくことで学級集団凝集性認知や集団から得る安心感が高まることは容易に予想できる。このような一連の結果から、仮説5は女子においては支持されたといえるだろう。

近藤・岡村・保坂(2000)、保坂・岡村(1986)によると、高校生ぐらいになるとこれまで中学校で構成していた親友からなるグループ (チャム・グループ) の関係に加え、互いの価値観や理想・将来の生き方などを語り合う関係 (ピア・グループ) が生じてくる。ピア・グループにおいては、共通点・類似性だけではなく、互いの異質性をぶつけ合うことによって、他者との関係が強固なものになっていくと考えられる。このことから考えると本研究の女子においては部分的に異質性を認知し始め、その異質性が凝集性を高める一要因になっていると考えられる。本研究の調査対象は3年生である。近藤らのいう高校生ぐらいで見られる異質性を認知するような関係が中学校のこの段階から見られ始めているのかも知れない。

以上から、本研究では、中学校女子において親密他者に対しての類似性認知が閾値を越え、非親密他者に対しても類似性を認知するようになり、

その結果、学級集団凝集性認知及び集団から得る安心感の高まりと関連をもつようになる可能性が示唆された。また、それに伴い部分的に異質性認知も行われるようになり、それもまた凝集性と関連をもつ可能性が指摘された。これら一連の成果は、学級の成員個々の関係から、集団全体がいかにか形成されていくかというメカニズムを想定することにおいて、本研究仮説の部分的な妥当性を支持していると考えられる。しかしながら、本研究ではそれを確信づけるだけの有意な結果を十分に得ることができなかった。今後は高校での調査を行い、本仮説が妥当なものか否かの検討が必要であろう。また、今回想定された個人の認知の変容から集団全体が形成されていくメカニズムをさらに明らかにするためには、個人間の親密度を縦断的に調査し、検討を加えていく必要もあるだろう。

引用文献

- 久保真人(1993). 行動特性からみた関係の親密さ - RCIの妥当性と限界 - 実験社会心理学研究, 33(1), 1-10.
- 根本橋夫 (1986). 心理学研究者にとって「個性」とは何か 心理科学, 10(1), 1-16.
- 小野寺正己・河村茂雄 (2002). 中学生の学級内における自己開示が学級への適応に及ぼす効果に関する研究 カウンセリング研究, 35, 47-56.
- 柴橋祐子 (2004). 青年期の友人関係における「自己表明」と「他者の表明を望む気持ち」の心理的要因 教育心理学研究, 52, 12-23.
- 下斗米淳 (1990). 対人関係の親密化に伴う自己開示と類似・異質性認知の変化 学習院大学文学部研究年報, 37, 269-287.
- 下斗米淳・佐藤寛之 (1988). 友人関係における行動期待について I 日本心理学会第52回大会発表論文集 69-70.
- 田崎敏昭 (1984). 対人関係欲求の研究(II) 佐賀大学教育学部研究論文集, 32(2), 163-173.
- Tesser, A. (1984). Self-evaluation maintenance processes: Implications for relationships and for development. In J. C. Masters & K. Yarkin-Levin (Eds.), *Boundary areas in social and developmental psychology*. New York: Academic Press. Pp. 271-299.
- Turner, J. C. (1985). Social categorization and the self-concept: A social cognitive theory of group behavior. In E. J. Lawler (ed.) *Advances in Group Processes: Theory and research* (vol. 2, pp. 77-122), Greenwich, CT: JAI Press.
- 蘭千壽・高橋知己 (2001). 自己組織化システムの活用 防衛大学校紀要人文科学分冊, 83, 141-165.
- Berscheid, E., Snyder, M., & Omoto, A. M. (1989). The relationship closeness inventory: Assessing the closeness of interpersonal relationships. *Journal of Personality and Social Psychology*, 57(5), 792-807.
- Byrne, D (1971). *The attraction paradigm*. New York: Academic Press
- 林文俊 (1978). 対人構造の基本次元についての一考察 名古屋大学教育学部紀要教育心理学科, 25, 233-247.
- Hogg, M. A. (1992). *The social psychology of group cohesiveness: from attraction to social identity*. London: Harvester Wheatsheaf (廣田君美・藤澤等監訳 (1994). 集団凝集性の社会心理学 北大路書房)
- 保坂亨・岡村達也 (1986). キャンパス・エンカウンター・グループの発達の・治療的意義の検討 心理臨床学研究, 4(1), 15-26.
- 磯崎三喜年・高橋超 (1993). 友人選択と学業成績の関連の時系列的変化にみられる自己評価維持機制 心理学研究, 63(6), 371-378.
- 梶田毅一 (1984). 自己意識の心理学 東京大学出版会
- Kokenes, B. (1974). Grade Level Differences in Factors of Self-Esteem. *Developmental Psychology*, 10(6), 954-958.
- 近藤邦夫・岡村達也・保坂亨 (2000). 子どもの成長教師の成長 東京大学出版会

(藤村 敦 附属特別支援学校教諭)

(越 良子 上越教育大学准教授)